

満洲浪漫 長谷川澹が見た夢

大島 幹雄著

おおしま・みきお 53年生まれ。著書に「ポリシヨイサーカス」「虚業成
れり『呼び屋』神彰の生涯」など。ホームページ「アラシネ通信」開設。

純粋な理想に危うさも



評・堀切 和雅

(エッセイスト)

若者には自然なロマン
的心情は「疾風怒濤」を
望むが、その結果には徹
底的に無責任なもの。国
家にもそういうことがあ
る。近代日本の青年期の

終わりに満洲という「フ
ロンティア」が開け、青
年気質を持ち越す多くの
者たちが海を渡った。そ
のひとり、傑出した才の
多い兄弟の三男坊・長谷
川澹は、「青鴉」と題
した不思議なノートを残
したほかに、大きな何か
をしたとは言えない。

戦後は逼塞していた
が、1956年、白系(非
共産)ロシアのドン・コ
ザック合唱団の日本招
聘で最後の脚光を浴びる
ことになる。かつて満洲
どころかコザックの村に
まで住み込み、民族と国
境を超えたコスモポリタ
ンを夢見た男は、青年の
ままだった。

大川周明や甘粕正彦と
深く関わったが、澹自身
は全くのノンポリ。昭和
恐慌を経た「時代閉塞」、
東北農村の窮乏による内
戦への懸念を日本は侵略
に転化した。その時中
国東北部に国民国家のま
とまりはなく、「俺も行
くから君も行け 狭い日

本にや住み飽いた 海の
彼方にや支那がある 支
那にや四億の民が待つ」
(馬賊の歌)という心の
風景があったのだ。

稚氣を責めるのは易し
い。「五族協和」は夢で
あると同時に帝国主義の
企てだった。現在の中国
民に向けて正当化するこ
とはできないが、青年た
ちの中には、確かに素朴
で純粋な理想があった。

極東ロシアはヨーロッ
パであるよりはアジア
だ。澹らが経巡った地、
出会った人々の精神の空
間には英米的な競争意で
はなくアジア的な共存へ
のアイデアと渴望があっ
たはず。満洲建国は米英
との対決を必然にし、だ
から保田與重郎ら「日本
浪漫派」は満洲と日本の
滅亡をむしろ美として熱
望しさえした。ロマン主
義の無責任性である。

いまた日本は時代閉
塞を迎え、悪質なロマン
主義が跋扈している。ロ
マンは人の心から根絶で
きない。だからこそ、そ
の善良な側面も正しく評
価しておかないと悪の側
面に対抗できない。澹の
人生はそれを教える。
(藤原書店 2940円)